

---

# 罪と罰

ルーシュ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

罪と罰

### 【著者名】

ルーシュ  
ヌード

N1645B

### 【あらすじ】

崩壊する世界で、僕はこの身に罪を背負つた。

「本当にいくの？」

入り口の階段に足をかけたようとした時、サラが言った。

軽蔑も、悲嘆も、まして喜びでさえ、その言葉には含まれていなかつた。

「何度も言つけど、僕はここに残るつもりは無いよ。ただ死ぬのを待つだけの運命なんて、僕には耐えられない」

「死ぬと決まつたわけではないでしょ。助かるかもしれない」「どっちにしろ、もうこの星が壊れてしまつたことに変わりは無いんだ。人工的に生かされるか、あるいはワクチンが開発されるか。色々な生きる可能性はあるけど、こんな腐つた星では、どっちにしても人間的生活は望めない」

そうだ。もうこの星は、どうやつたつて助かるはずはない。だから僕は、行くしかないんだ。

「へえ。まるであなたが行くところは、素晴らしい生活ができるみたいね。羨ましいわ」

違う。そんなわけない。だって僕が行くところは……

「分かってそういう事を言うなんて、やっぱり君はひどい人だね」サラに向かつて怒鳴ろうかと思つたけど、やめた。

たぶん今の彼女に何を言つても無駄だ。それに、言つてしまえば惨めになるのは自分だから。

これ以上決心が揺らげば、たぶん今度こそ、僕はどこにも行けなくなってしまうから。

「今から大犯罪者になるあなたに、ひどいなんて言われたくはないわ

彼女は相変わらず無表情のまま、ただ述べる。

「僕は星を出る許可をもらつてゐる。犯罪者とは言わないよ」「つうん、そういう意味じゃないわ。あなたの罪はね、星を出る」

とじやなく 殺人よ

僕は彼女の言つた意味が分からなかつた。

だつてサラは分かつてゐはづだ。僕が誰よりも『死』を恐がることを。

人が死ぬのを見るのが嫌だから星を出るのに、僕が人を殺すはずがない。

「あなたは、この星の全世界の人々を殺すのよ。今この瞬間にいる、全人類を」

もちろん、私を含めて。

そう彼女は言つが、僕はますます分からない。

「できるはずないだろ。それに僕は人が『死』ぬのは大嫌いなんだ。だからこそ

「だからこそ、そうやつて自分が見えない所で皆を消そうとするんでしょ？」

彼女は少し怒つたようだつた。

「あなたがこの星に戻るときは何年後？ 五十年？ 百年？ 宇宙では時間の進み方が違うから、あなたが一年行つていただけで、こつちはそれ以上が経過する。あなたが帰つてきたとき、私たちの誰が残つているというの？」

彼女の口からは雪崩のように言葉が出てくるのに、僕からは何も出てこない。

「世界中の人間を殺すのと、自分が違う世界に行くのとは、何も変わらないわ。だつてどちらも、その世界ではあなたと私たちとは共存してないんだもの。それに、きっとあなたは百年しても戻つてこない。あなたが望むような世界になるには、きっと途方も無い時間がかかるから。あなたにとつてはたいした時間でなくとも、その頃には、今いる人々は誰一人として生きてはいない」

「……………『ごめん』

僕は、謝ることしかできなかつた。それさえ満足にできなかつたけれど。

「そう思うなら一緒にいてよ。長くは生きられなくても、私は最後まであなたと生きたい」

「それは…………嫌だ」

「どうして…？ 私を愛してるって

「言つたさ。もちろんそれは本當だ。だけど、だからこそ、嫌だ。僕は、最愛の人の死を見るなんて考えられない」

彼女の口が動きを止めた。

「僕は本当に臆病者だ。人が死ぬのを見たくないて、どうせ死ぬならと、自分の目に写らない所で皆殺しにしようとすると。そう、君でさえも。僕は『死』が恐いんじゃなくて、それを見るのが嫌なだけなんだろうな」

これこそ、究極のわがままだ。

僕は内心でそう思い、そして笑つた。何も面白くは無かつたけれど。せめて彼女が最後に見た恋人の顔が、笑顔として残るよう。

「それじゃ、僕は行くよ。これ以上ここにいると、離れられなくなる」

僕は階段をのぼりきり、中に入ろうとする。

「じゃあ最後に一つだけ聞かせて…！」

振り向くと、彼女が思い詰めたように呟んでいた。

「自殺という手は無かつたの？ 皆と同じように、あなたもここで死ぬことはできなかつたの？ 死を見るのが恐いんだつたら、そうすればいいじゃない！！ そうすれば、少なくともあなたの骸はここに残るわ！ 私は、あなたが死んだ後でもあなたを見ることができる！ なのに、それすらも許されないの！？」

彼女が涙を流した。

ああ、罪深い男だ、僕は。

最後まで、彼女を笑わせてあげられなかつた。  
その上、泣かせてしまつた。

これは僕が犯した罪の罰だらうか。

分からぬ。

でも、

「その骸を見ても、君は生きていられるのかい？」

僕はそれでも止まらなかつた。

それだけ言つて、彼女を振り返りもせず、一目散に操縦席に座る。  
ああ、僕は果たして笑顔でいられただらうか。彼女と、笑つて別れ  
られただらうか。

せめて、彼女の記憶に与る僕が、いつまでも笑顔でいられますよう  
に。

僕は、ロケットを発進させた。

× × ×

あれじやあ、僕が彼女を想つて自殺しなかつたみたいじやないか、  
と今更ながらに思つ。

それは決して嘘じやない。彼女が僕の骸を見て後追い自殺をはかる  
うとするのは、目に見えていたから。けど、本当でもない。  
僕はどこまでもずるい男だ。

そしてわがままな男だ。

だから自殺しなかつたのも、たぶん自分のせいなのだ。

僕は『死』が恐い。人が死ぬのが。そして 自分が死ぬの  
でさえ。

つまり僕は、死にたくなかつたから、自分以外を殺したのだ。  
共存できないことがわかつていたから。

どちらかが、死なねばならなかつたから。

しかし、彼女がこんなことを言つていてのを思い出す。

『 世界中の人間を殺すのと、自分がだけが違う世界に行くの

とは、何も変わらない。どちらも、その世界では共存しないから

『

だったら、例え自殺をしても変わらないじゃないか。自殺をすれば『死』の世界に行き、生きている人とは永遠にまじわらない。それは結局、今の自分と変わらない。

いや、もしかすると、僕以上の犯罪者だろう。だって僕は世界中の人に殺したけど、自殺すれば『自分』さえも殺してしまうのだから。彼女はあれからどうしただろうか。

寿命をまつとうしたのか。それとも、ウイルスにおかされたか。彼女の『死』を見なくていいのは良かったが、彼女がどうやって死んだか分からるのは残念だ。

願わくば、彼女が自殺をしなかつた事を望む。

犯罪者になるのは僕だけで十分だ。その罪を背負うのも。

僕は丘にあがり、そこに腰をおろした。

そして景色を眺める。

人などいるはずのない、荒廃した大地を。

そして感じる。

自分の罪の重さを。

「これが、望んだ世界、か」

声は風に乗り、どこまでも流れしていく。しかし残念なことに、この星にはその声を受け取る者は誰一人としていない。

そして僕は立ち上がった。この星の千年を殺した責任を果たすために。たつた一人で、生きていくために。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1645b/>

---

罪と罰

2010年10月17日20時08分発行